
デスティニー・ワード

ヒル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニー・ワード

【Nコード】

N7407X

【作者名】

ヒル

【あらすじ】

魔法、科学、能力も発達した世界に住む、不思議な夢を見るアケヒという気の弱い青年は、二重人格という病に悩まされながら、心強い仲間と共に長い人生という旅を始める。

もしよければ、手にとっていただければ幸いです。

作者の脳内で出来ているストーリーでは、最後まで書ければ、個人的最高傑作になるのではと考えています笑

最高傑作とか、あたいうてば最強ねっ!!

START

・・・朝、とても不思議な夢を見た。そこはこの世界みたいに戦いに身を置いた世界なんかじゃなくて、とても平和で、とても平穏な世界だった。道はとても綺麗に整備されていて魔物もない。四輪駆動の乗り物が走る道も出来ているし、そして何より大きな建物が無数に立っていた。防衛施設の一つもない。

それほど世界は平穏なんだ。僕はそう思った。銃すら持っていないし、全身骨格鎧アーマードや、近接戦闘武器も持っていない。僕は性能もない制服に身を包んで、鞆を持って学園に行くのだ。

笑いが絶えない世界。幸福の世界。だが、それはー夢でしかない。
「・・・」

最近、この夢ばかり見る気がする。別に今の生活に不満を持っている訳ではないのだが、起きると不思議と気分がいい。今日ならば、アドレンとも遊んでやるか。

++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++++
++++

「馬帝、ターゲットからかなり離れているよ」

「そんな事分かってるッ！それと馬帝っていうなッ！」

ターゲットがいる林とは近辺の街の屋根を飛ぶ筋肉隆々の馬帝と青髪のサイドテールヘアスタイルの女性。

「武器構築」

馬帝がそう言った瞬間、魔方陣が現れ、その中に手を突っ込んでとても長い銃を取り出した。

「ターゲットの詳細を刷り込み《インプリンティング》」

銃を両手で持ち、引き金に手をかけるとその場で制止した。

「馬帝、コスチュームはいいの？」

「今回は戦場じゃないんだ。無駄に暴れる必要なんかない」

「さすが、馬鹿なだけでは無かったんだね」

「当たり前だっ！筋肉馬鹿だと思うなッ！ターゲットに目標を構築最短距離で最速で、最強に決める」

目の近くにモニターのように敵の拡大された映像が現れ、道が引かれていく。

「戦王の異名を見せて上げてやるぜエー！！」

引き金を引くと、銃口から光が溢れ、ターゲットに向かって発射された。その速度は銃弾よりも早く、ライフルよりも的確に目標に直撃した。だが、サイドテールの女性は苦笑を漏らした。

「残念、相手は治癒能力が危機を回避したね」

「くそッ！精度を高めすぎたが、一発ドカンとすれば良かったぜ」

「いや、作戦開始時に先生から、治癒能力が高い事聞いたじゃん」

「ああ？そうだったか・・・」

「やっぱり、馬帝だね、フッフ」

「うるせえ！お前だけいい異名ついてるからっていい気になるなよッ！」

へヴィレールを空間に戻して、馬帝は目標を追って走り出した。続くように女性も走る。

「このままじゃ、剣聖と戦車女に負けちまう！さっさと倒しに行くぞッ！アイザ」

「多分、負けるねこれは、劉政リウセイ」

+++++

林の奥地、着物に身を包んだポニーテールの少女と、金髪碧眼の神の上から耳のような物が生えた学校指定の制服に身を包んだ少女は駆けていた。

「神泉、あの光は多分馬帝のものかしら」

「どうでござろうか、多分、そう思われるが、マキナ師が仰られた通りなら、敵には治癒能力が高いと・・・」

「そうね、多分相手は生きていますわ。だって馬帝ですもん」

「確かにその通りでござるね、では一気に近づいてござるよッ!」

「そうね、先陣をお願い、引きつけて置いてくれたら、あとは叩き潰すわ」

「分かってござる。ではッ!」

その瞬間、一気に加速して馬帝が晒した敵の場所に向かう。体勢を低くして腰に挿した刀に手をかけて――目標が見えると同時に引き抜いた。

目標は腕を硬化させて、その一筋を防ごうとするが、剣聖にはそんなもの意味など成さない。なんの抵抗もなく軽々腕を切り落として、踏み込んだ足を軸に刀を反り返した。

目標は人の形をしていながら、感情、痛覚、感覚を持っていなかった。それゆえに腕を切り落とされても、目標は苦痛一つ見せず、切り落とされていない手で剣聖に掴みかかった。

剣聖は一瞬にして、反り返しの向きを変え、掴みかかる腕を切り落とした。両腕を落とした目標は、直ぐ様治癒に掛かる。地面に転がった腕が蒸発していき、新たな腕が生えてくる。

――その直後、ずしんッ!と地面を大きく揺らす程の地震かと勘違いするほどの轟音を経て、何かが降ってきた。槌だ。それも剣聖と同じくらい大きな槌を振り下ろしていた。それは鎧だった。

「お待たせ、どう、待ったかしら?」

「ナイスなタイミングでござる、ブリジット殿」

「貴方の攻撃も最高よ、神泉」

槌の下敷きになった目標は、それでも動く気だ。すでに腕は再生を初めており、手首の近くまで再生をしていた。

「私の全力でも、生きていますなんて、本当に化け物ね」

「確かに、これは驚きを隠せないでござるね」

槌を退かそうとする化け物は俯せながら、徐々に起き上がって

た。流石に呆れたブリジットは溜息を一つ漏らして、神泉に一つ提案した。

「私、フルパワーでやっていいかしら」

「それは駄目でございます。近くには街があるのにそんなことしたら、被害が出るかもしれぬ」

「うぐぐ、腹立たしいわね。こんな時にアケヒはどこに行ったのかしら」

「さあ、分からぬでございますな。あっちなら迅速に来てくれるのだが」「あんな戦マニアに來られては、こちらの活躍が水の泡ですわ」

「ーなら、そのまま止まってるッ！戦車女ッ！！」

空高くから一気に下りてくる影。筋肉隆々で片腕にブリジットと同じ鎧のような腕を装備して、肘からブースターが火を上げる。

「これで、終わりだああああ！！」

槌の反対側から、その体格に不格好な鎧の腕を振り下ろした。起き上がりかけた化け物は馬帝の一撃で轟音と共に、砕け散った。蒸発していくその体に満足げに劉生は腕を解除した。

「ふう、やってやったぜ！」

「おお、これは予想外だよ。僕も驚いたこれは勝ったね」

後から追いついたアイザは、楽しげに笑いながら劉生の横に並んだ。ぐぐぐ、と震えるブリジットは地面につけた槌を起き上がらせ、劉生に向かって振った。

「うわッ！あぶねッ！？何しやがるんだッ！あぶねえじゃねーかッ！」

「当然よ、勝利が確定したわたくし達から奪おうと考えると、どれだけ汚れていますの。わたくしが肅清して上げますわ」

「倒したのは俺だろッ！」

「いいえ、わたくしの攻撃の時点でわたくしの勝利ですわ！」

「どんだけ傲慢なんだよッ！戦車女」

「わたくしは戦車女なんかではありませんわ、馬帝」

「俺は馬帝じゃねえ！」

二人が暴れる中、アイザは上泉の元へとそつと寄った。

「あいからずだね、この二人・・・」

「そうでござるな、それより、今回の敵。どう思ったでござるか」

上泉は凹んだ地面を眺めながら、それに合わせるようにアイザも視線をその凹んだ地面に向けた。そこには先ほど倒した敵の残骸すら残っていないただ凹んだ地面だった。

「・・・そうだね、僕が思うに今回のV感染者はかなり手強かったと思うよ。斬撃系にとっては天敵だろうね」

「やはり、ですか」

「でも、こんな事態でもアケヒなら簡単に倒してしまうんだろうね」

「・・・さすがでござるな、アケヒ殿」

「さ、僕たちは先生に報告しよう。いくよー劉生エー」

「ブリジット殿、拙者たちも行くでござるよ」

二重のアケヒ

「・・・で、報告を終わります」

四人は集まってマキナ先生の元へと報告しに行った。そして四人の中で代表して、アイザが丁寧に一から十まで説明するとマキナは腕を組んだままふむふむ、と頷いた。

「なるほどねえ、斬撃系とV感染者は相性が悪いと言うわけね」

「はい、個人的にはそう考えました」

「確かに並みの斬撃系ならかなりの時間を要するかもしれないわね。じゃあ、アイザちゃんに質問」

「え、なんででしょうか？」

「V感染者は、何を利用して治癒能力を活性化しているでしょう？」

「それはもちろん、血液の循環を利用して、血液中に治癒を超促進する正体不明の菌のようなものが原因だとは聞いた事がありますけど・・・」

「そう、確かにその通りよ。まあ、僕もその位しか知識はないけどね。じゃあ、その川のように移動する血液の動きを止めるにはどうすればいい？」

「・・・心臓？ですか」

「その通りッ！血液のポンプの代わりをしている心臓を引き抜けばいいのだよ。心臓の位置はわかるかい？」

とマキナは何気なく、アイザの胸に手を伸ばした。そして、何気なく触った。

「ここにあるんだよ。心臓、神泉。剣聖の君なら取り除く事くらい可能だろう？」

「た、確かに不可能ではござらんが、今回見た限りでは体の部位から離れたパーツは再生するのでは？」

もみもみ、

「確かにその通りだ。手足が飛ばうがすぐに蒸発して再生してしま

う。ここで必要になるのが、銀の杭か、にんにくかだ」
もみもみ

「銀の杭を再生されたくない部位に刺せば、その部位の再生速度は人並みまで落ちる。にんにくはその正体不明菌を双対して消滅することが出来る。いわばV感染者のアレルギーみたいなもんだ」
もみもみ、

「いい加減、そのセクハラに僕は腹を立てそうです」

「あ、悪かったな。もう少しだから待ってくれ」
もみもみ

「何がですかッ！手を離して下さいッ！！」

アイザはマキナの手を強引に払って顔を少し赤らめながら、自分の胸を隠した。

「これが若さの秘訣だよ、ははははッ」

「ギロリッ」

「・・・というのはいいとして、一番重要なのは、十字架だ。それもちゃんと聖水で浸し、神の祈りを捧げた十字架、それは見るだけでV感染者を蒸発させる事ができるスーパージョウブアイテムだ」

「なら、最初からそれを使えばよいのではなくて？」

「おっとデカパイちゃん。それは残念だけど出来ないんだな」

「で、でかぱいッ!？」

「デカいんだからデカパイだろ。裏アケヒも言ってるだろう？、そんな話はいい。十字架だが、残念だが聖水というものはこの世の中に存在しないんだよ」

「だからこそ、十字架は幻のアイテムってか？」

「そうね、劉生くん。でも一人例外がいるのだけど・・・」

その時、タイミングよく、マキナの下に連絡が入った。通信機器からの連絡でマキナはそれを確認すると、笑ってみせた。

「さ、皆、Bチームと合流しつつ、アケヒを迎えに行こうか」

+++++

「先生への連絡を入れてって最悪だよ。まさか遅刻するなんて・・・」

アケヒは身支度を急ぎ、マキナの元へ急いで駆けていた。この辺の道は比較的整備されていて、人通りも多い。そこから今回の依頼であったV感染者の討伐完了次第に決めた目的地に急ぐ。

アケヒは走りながら、手を横に払い、透明なウインドウを開いた。そこから地図を開いて現在地と目的地にマーカーを起動させる。ここから目的地には最短距離で向かうのなら、近くの林に入らなければならぬ。けれどアケヒは走りながら時計を睨み、ルートを変更した。

縦に並んだ街並みから横に林に向かった。ざっと空気が変わる。人の気配が消え、静寂に包まれる。

「・・・なんか、雰囲気が変わだな」

その時、アケヒは何も触っていないのに緊急を表した赤い枠線に目標の接近と書かれ、地図に近くにマーカーが表示された。

「ッ!?なんだ目標って、もしかして」

地図に表示された赤く点滅したマーカーの方角にすぐに視線を向けると木々の中から、ゆらりゆらりと生気を感じ取れない人のような物がこちらに向かってきていた。

「V感染者ッ!?先生が言うにはもう倒したって言ったのにッ!」

「ーこれは、俺様の出番だろ?なあ?アケヒちゃん」

「・・・僕だって少しは能力は使えるよッ!」

「ーそうか、じゃあ少しだけ見といてやるよ」

徐々に迫ってくる敵にアケヒは体勢を構えて、手をかざした。すると手に合わせるように西洋の剣が姿を現した。剣のシルエツトが透明から形を作り、アケヒはぐっと剣を握んで、構えた。

V感染者は剣に臆する事もなく、アケヒを確認するなり一気に距

離を詰めてきた。

「大丈夫、一人でも勝てる」

アケヒは深呼吸をして、両手で剣を持って、タイミングを計る。剣術は剣聖から少しは習っている。今のアケヒでも突進してくる敵を切ることは容易い事だった。剣聖上泉のように鋭い剣筋ではなく、一般兵としてのレベルだった。それでも西洋の剣が敵の腕に傷を与えた。

「ああ、それじゃ、駄目だア。あまあまだなアアケヒちゃんよオ。取り敢えず、距離を取れ、そのままだと死んじまうぞ」

「ッ!？」

言われるがままアケヒは直ぐ様、横へと飛んだ。その直後、痛覚が無いV感染者はそのまま突進して先程アケヒは立っていた場所を通過していた。

「あの系統にはそのへっぽこじゃ、勝てねえな。」

「うるさいよッ、じゃあどうするのさッ!」

「俺に任せろ。お前は見てろ」

すぐに体勢を戻したV感染者は振り返って、アケヒに長い爪で喉元に向かって突き刺した。が、その腕をアケヒは素手で掴んだ。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんッ俺様、降臨ッ!」

先程まで大切に握っていた剣を落とすとまるでガラスのようにパリンといとも容易く砕けて、蒸発したように露散した。

V感染者は驚きもせず、薄い唇からはみ出た双対の異様に長い牙をアケヒの首に向けて、噛み付こうとした。

「V感染者つてのは、そう血が欲しくなるものなのか?」

アケヒは大きく口を開いたV感染者に対して、口内に何処からともなく銃を取り出して、口に入れた。

「じゃあ、お前の血をやるよ」

何の躊躇いもなく、引き金を引くと乾いた音と共に、V感染者の頭が大きく後ろに引っ張られるように吹き飛んだ。アケヒはそのまま、突き飛ばすように胴体を突き飛ばして、距離を取った。

「俺様はな、血を吸うようには見るほうが、好きだな」

体勢を戻そうとするV感染者に一気に距離を縮め、五本指を開いて、心臓がある胴体に突き刺した。腕まで体内に入り、そのまま何かを掴むとそれを引き摺り出した。

「ーどくん、どくんと鼓動を今も尚脈打つ生き物のような赤い手の平に乗るほどの物体。」

「だけど、流石にこれは気持ち良くねえな・・・」

それはV感染者にとっても生物にとっても、命のようなものハートである。つまりー心臓だ。蒸発せずに今だアケヒの手の中にあるその心臓は徐々に鼓動を休めていく。

「ウグウ・・・アグウ・・・」

苦しそうに悶えるV感染者はそれでも、アケヒに向かって足を引くように、向かってきた。

「あばよ、快樂の死を知ってみるといい」

とアケヒは手に乗った心臓を握り潰した。四散に碎け散った心臓は血や心臓を作る素材が周囲に巻き散らかる。

「アガアアアアアアア」

それと同時に、V感染者は砂の様に体の形を崩壊させて、儚く散っていった。周囲に飛び散った心臓も砂に帰る。

「わかったか？これが戦い方だ」

アケヒはもう一人のアケヒにそう言うと、銃を手から離して、崩壊させると同時にマキナ先生が生徒8人を連れて、アケヒの元へとやってきた。

日常

「おやおや、流石ですねえ」

と手を叩きながらやってきたマキナ先生に、アケヒは視線を向けた。面倒くさそうな表情をした。

「ほら、見てください。先程も言いましたが彼はイレギュラーですからね。V感染者にも対応が出来るというハイスペック。先生も驚くばかりだよ」

「つて、全然驚いているように見えないわよ・・・先生」

「いえいえ、かなり驚いていますとも、ええ、それはもうびっくり仰天ですよ。飛び出る目玉があるなら、もう、宇宙圏くらいまで飛んでいますよ」

「それは驚きでござるな」

上泉とブリジットがマキナの相手をしていると劉政とアイザがアケヒの元にやってきた。

「おい、どうすればそんな特殊能力を手に入れるんだ？」

「まあ、確かに気になりますね」

「・・・俺様は最強だから」

「なんだとお？最強は俺の称号だッ！」

「諦めなよ馬帝。流石に戦神に挑むのは馬鹿の証拠だよ」

最強という名に敏感な劉政は、今にも戦闘体勢だ。それに対してアケヒはまるで相手にしていないように、無視している。その時、Bチームから一人の男が劉政の元に近づいた。

「まあ、馬帝一人なら勝てないかもしれないな。だけど僕の計算なら、A・B両方掛ければ、いい勝負にはなると思うよ」

「ちよつと、佐久間さんッ！なに煽っているんですか。こついう時は止めないと・・・」

佐久間に思わず一人が顔を出した。

「いいじゃない。この方が楽しそうだし、戦闘練習には丁度いいし

ね。シャルロットもいい機会だと思っよ」

「・・・ですが、」

「アケヒ君？1対9どう？」

「俺様は構わない。負けることなんてないからな」

「ーダメだよッ！皆、僕の友達だから傷つけたら

「それくらい、分かつてる。まあ、殺さない程度にやってやるよ」

アケヒも戦闘準備が完了したようで、左手を無意味に銃の形でみんなに向けていた。それに感化された劉政は、頭に血を登らせ、アケヒに向けて走りだした。

「本気で行くぞッ！武装骨格鎧《はたとせ不如歸》」

劉政の周囲に自分の体を囲うように鎧が姿を表して、劉政の体を覆った。二倍近い体格になった劉政は速度を緩めないまま、寧ろ加速して、拳を構えた。

「おらああああああ！！」

力任せに振り抜いた鉄の拳にアケヒは後ろに跳ねてかわすと、アケヒは手を開いて見せた。その手のひらからショットガンを作り出し、引き金を引いた。

「そんな鉛玉ア！効くかよ！」

銃口から発射された鉛玉は劉政の装甲に当たると傷一つ付けずに、速度を無くし、弾かれる。

「口だけかッ戦神！」

「お前がな」

その瞬間、弾いた鉛玉が大きく発光して、爆発した。

「なっ！？ぐわっ」

腕を交差させて、爆発に巻き込まれた劉政に対して、アケヒはショットガンから手を離して、新たにUノ字の武器を二丁取り出した。

「その鎧貫いてやるよ。馬帝」

窪んだ隙間から光が充填されていき、溢れ出しそうな位、光が眩く漏れる。

「馬帝、肩借りるよッ！」

爆煙の中から、馬帝の肩を借りて、一気に飛び出してきたアイザは指を弾いて見せた。

「形状を攻撃として、充填、速射開始」

その瞬間に、近くにあった木が根から抜かれ、アケヒに向かって飛んだ。

「その程度じゃ、これは防げねえ!!」

飛んでくる木に驚きもせず、片方だけ引き金を引いた。充填されたエネルギーが爆発して、直線

上に木を軽々貫いた。イーが、その攻撃は何かを防がれた。

「おいらの魔方陣の硬さを馬鹿にしてもらいたくないな」

とても長い魔法帽子を被った背丈の小さい女の子が笑ってみせた。

「・・・」

小さい女の子は無視して、アケヒは横の誰もいない茂みにレールガンの引き金を引いた。エネルギーが爆発して、電磁を纏った一撃が草むらを襲った。草むらを爆発させた。

「・・・村田くんッ!!」

同じく草むらに潜っていた羽が生えた愛くるしいキャラクターのような奴が現れ、爆発した草むらに叫んだ。

「イーその直後に反対方向から、一人が抜け出した。」

「戦神、悪いけどわたくしも本気で行かせてもらいますわよ」

「構わねえ、だが、あのヘタレ野郎と違って俺は女でも躊躇わねぞ」

「イーヘタレっていうなよッ！」

「構いませんわッ！寧ろ好都合というものの武装骨格鎧《地盤》」

劉政と同じように、ブリジットにも骨格が装備される。茶色の色をメインとした工事のような機体。と同時に巨大な槌を両手で掴んで、振りかざした。

「行きますわよッ！」

大きく振った槌をアケヒは軽快に回避していく。

「戦車型というのは、隙が多い職なのか？」

「そう思っていればいいですわ」

大きく上から振り落とした槌をアケヒは一気に飛んだ。その直後に待っていたかのようにブリジットは体勢を低くした。するとブリジットの《地盤》の周囲に無数のドリルが形成される。

「なるほど・・・」

「どうか、この程度に死なないで下さいまし。掃射ッ！」

無数のドリルが高速で回転をし、一気にアケヒに向かって発射される。アケヒは直ぐ様レールガンを手から離して、左手を突き出した。左手の目の前に大きく分厚い鉄の板が形成された。

ガンガンガン・・・と鉄の板にと直撃して、キューーンという高音を立てて、鉄の板を削っていく。

その攻撃の最中に右の草むらからキラリと何かが輝いた。アケヒはすぐに右手に刀を作りだして、その剣筋に防ぐように突き出した。突き出した瞬間に、何かが一瞬で姿を表して、ぶつかった。

「剣聖、まさかの不意打ちとは」

「これも作戦なら不意打ちではないでござる」

「残念ね、剣聖には武士道には反していないのよ」

「それは残念だ」

「よそ見とは、関心しないでござる」

剣を逸らして、アケヒの胴体に向かって剣筋を伸ばした。

アケヒはすぐに剣から手を離して、正方形の鉄の板を形成させて、剣山のように無数の刺を剣聖に向けて、放った。

「ッ！」

咄嗟に上泉はバックステップで攻撃を回避して見せた。だが、アケヒは剣山の鉄を小さな鉄の塊に変えて、発射した。上泉はそれを巧みな剣捌きですべて弾いた。

次に鉄の板を削るドリルを丸ごと飲み込むように巨大な球体を作り出すと、そのままブリジットに向けて、発射する。

「なッ!?!」

球体に巻き込まれるようにブリジットの地盤は後ろに吹き飛ばさ

れた。

「どけッ！邪魔だっ！」

背中ของブースターで横にかわして、劉政は更に加速して拳を突き出した。

「先生、止めなくていいんですか？」

劉政・アイザ・上泉・ブリジットの四人の猛攻も耐えているアケヒを眺めながら、シャルロットと佐久間はマキナの元でその光景を眺めていた。

「うむ、でもいい勝負じゃない？」

「それは確かに、攻撃は四人のコンビネーションで防御は不知火ですか。それから草むらの陽動として、村田君とプリティー君の二人か、なんだかんだでいい勝負じゃないか」

「そうかもしれないませんが、油を注いだ佐久間さんがここにいてどうするんですか？」

「そうだね。僕も行っていいと思うよ佐久間君」

「いや、私は遠慮しておこう。あいにく戦闘はあまり好みではないからね。それより、シャルロットの方が、攻撃に参加したらいいんじゃないか？」

「いえ、私も戦いは好きじゃないんで・・・今回は遠慮しておきます」

「二人とももつと、積極的でもいいじゃない？」

「いいんですよ。それより、今日じゃないですか？金獅子が来られるのは」

「おや、流石佐久間君。情報をかき集めるのが凄いですね」

「金獅子って、もしかして上の国を納めるあの伝説の方ですか？」

「そうだよ。シャルロットも知っているみたいだね。ここ下の国に如月 清志郎と共にくるみたいだよ」

「それは私達が御会いしてもよろしいものなのか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7407x/>

デスティニー・ワード

2011年10月27日15時08分発行